左頬部石灰化上皮腫の1例

長谷川秀行・松崎佳子

Calcifying epithelioma in the left cheek
region: report of a case

Hideyuki HASEGAWA・Yoshiko MATSUZAKI

Key words: calcifying epithelioma (石灰化上皮腫), epithelioma (上皮腫), calcification (石灰化物)

緒言

皮膚組織の局在性の結石の1つである石灰化上皮腫は、骨様硬の良性腫瘍で、顔面頸部に好発するが、口腔外科領域では取り扱われる頻度が比較の少ない疾患である。今回著者らは、左頬部に発生した石灰化上皮腫を経験したのでその概要を報告する。

症例

患者: 5歳 男性。

初診: 平成3年9月■日。

主訴: 左頬部の腫瘍。

家族歴・既往歴: 特記事項なし。

現病歴: 約1年前、左頬部に米粒大の腫瘍に気づくも、無痛性のため放置していた。しかしその後、徐々に増大傾向を示すようになり、また圧痛も伴うようになったため、不安になり当科を受診した。

現症

全身所見: 体格、栄養状態ともに中等度で、その他、特記所見はなかった。

顔貌所見: 左頬部皮下に大きさ約 24×23 mm, 円板状、境界明瞭な骨様硬の腫瘍を触知した。表面の皮膚色は正常であった。腫瘍は皮膚とは軽度の癒着があったが、基底面においては可動性を有していた。自発痛はないが、軽度の圧痛を訴えていた。また、所属リンパ節の異常は認めなかった。

X線所見: 頭部P→A方向による軟X線撮影により、左頬部皮膚直下に境界比較の明瞭な顆粒状の石灰化物を含む腫瘍が観察された(写真1)。

横浜船員保険病院歯科口腔外科

(主任: 長谷川秀行医長)

Department of Dent. Oral and Maxillofacial Surgery, Yokohama Seamen's Insurance Hospital
(Chief: Dr. Hideyuki Hasegawa)

受付日: 平成3年12月19日

写真1 頭部P→A方向(軟X線写真)

写真2 病理組織像(H-E染色)

臨床検査所見: 異常所見はなかった。

臨床診断: 左頬部石灰化上皮腫。

処置ならびに経過: 平成3年10月■日、局所麻酔に静脈内鎮静法を併用し、腫瘍摘出術を施行した。腫瘍は容易に剝離摘出できた。術後経過は良好で、現在まで再発は認められない。

摘出物所見: 腫瘍の大きさは20×15×9 mmで、硬さは骨様硬、表面は薄い線維性被膜で被われ、赤褐色から灰白色を呈していた。剖面は充実性で石灰化物に富み灰

白色を呈していた。

病理組織所見：腫瘍実質はエオジンに淡染し、核が明るく抜けるようにみえる陰影細胞が広範囲に存在した。また辺縁にはごくわずかに好塩基性細胞の残存もみられた。腫瘍間質は比較的緻密で、石灰沈着が随所にみられ、異物巨細胞の出現とともに小円形細胞や好中球の軽度の浸潤が認められた（写真2）。

病理組織学的診断：石灰化上皮腫。

考 察

本腫瘍の組織由来については、従来より論議を呼び、緒説唱えられているが、今日では毛の組織発生と関連しており、毛嚢分化過程における毛芽あるいは毛母機能の障害から発生するという見解が支持されている¹⁾。

本症の名称について Forbis ら²⁾は、上皮腫という名称は悪性の意味も含まれるため pilomatrixoma の名称を提唱した。新妻ら³⁾は、石灰化は本腫瘍に必発の所見とはいえず、実質細胞の壊死が本腫瘍の本態であって、石灰化はこれに付随して起こる現象であると述べており、今日でもしばしばこの名称が用いられている。

本症は一般に若年者に好発し、老年者、乳幼児の発生例は比較的まれとされているが、大塚ら⁴⁾は87歳の老人を、王ら⁵⁾は7か月の乳児の例を報告している。自験例では5歳の幼児で、比較的まれな症例であった。

顔面および頸部における好発部位は、上眼瞼部、眉毛周囲部、耳前・耳後部、項部の毛のはえぎわ、胸鎖乳突筋の後縁に沿う部分といわれている。自験例では耳前下部で諸家の報告に一致するものであった。

臨床所見は、成書によると多くは正常皮膚に被われ、皮膚中に存在する骨様硬の良性腫瘍で、皮膚はときに褐、赤褐、淡紅色等を呈したり毛細管拡張をみることもある。多くは小指頭大で半球状に隆起するが、まれには米粒大、小児手拳大のものもあり、一般には自覚症状を欠くが、圧痛を訴えるものもあるとされている⁶⁾。自験例では、被覆する皮膚の色は正常で、皮下に骨様硬の腫瘤として触知した。また、大きさは小指頭大で、1年前に腫瘤を自覚した際には、米粒大とのことであった。なお、本症例では軽度の圧痛を訴えていた。

皮膚あるいは基底部の癒着については、丸山ら⁷⁾は18例中10例に、新妻ら³⁾は36例中24例に皮膚との癒着を認め、さらに2例に基底部との癒着があったとしている。本症例ならびに過去に経験した症例⁸⁾では、ともに皮膚との癒着を認めたが、基底部においては可動性であった。

青木ら⁹⁾は、本腫瘍の臨床診断について、一度本腫瘍

の触診を経験すれば少なくとも疑いのもてる疾患と述べている。著者らも過去に一度本腫瘍を経験しているもので、臨床診断は容易であった。

病理組織学的特徴としては、大型で円形または楕円形の塩基性核を有し、原形質に乏しく細胞境界不明瞭な好塩基性細胞と、核を有さず好酸性で細胞境界明瞭な陰影細胞よりなっている。一般に、発生後まもない腫瘍では好塩基性細胞が多く、陳旧性になるに従い陰影細胞が多くなるといわれている。本腫瘍の石灰化については陰影細胞に認められるが、とくに経過の長いものではまれに骨形成が認められる場合がある。また、周囲結合組織に異物反応として慢性異物性炎症反応がみられ、異物巨細胞を認める場合がある。本症例では、ほとんどが陰影細胞と石灰沈着であったことから陳旧化した症例と考えられた。

本症の治療法としては、一般に単純摘出で十分で再発は少ないとされている。自験例でも同様に単純摘出を行ったが、術後約2か月と経過が短いものの、現在まで再発は認められない。

結 語

5歳男性の左頬部に発生した石灰化上皮腫の1症例を経験したので報告した。

引 用 文 献

- 1) 久保 緑：石灰化上皮腫、その組織由来に関する考察。臨床皮膚科 27: 645-659 1973.
- 2) Forbis, R. and Helwig, E.B.: Pilomatrixoma (Calcifying epithelioma). Arch Derma 83: 606-618 1961.
- 3) 新妻 寛, 秋山まり子, 他：石灰化上皮腫。皮膚科の臨床 8: 206-212 1966.
- 4) 大塚 寿, 塩谷信幸, 他：Calcifying epithelioma の臨床像について。形成外科 16: 447-452 1973.
- 5) 王 鈞軍, 佐藤昌三, 他 Calcifying epithelioma — 幼児に発生した2例 —。皮膚科の臨床 8: 137-140 1966.
- 6) 山村雄一編：現代皮膚科学大系。第9巻, 金原出版, 東京, 1969, 54-57頁.
- 7) 丸山雄造, 白沢健二郎, 他：石灰化上皮腫 (Malherbe) の18例。皮膚科の臨床 9: 729-736 1967.
- 8) 長谷川秀行, 河合貴久, 他：右側頸部に発現をみた石灰化上皮腫—組織成分と組織形態学的検索—。日口外誌 29: 1579-1583 1983.
- 9) 青木伸二郎, 川辺良一, 他：左頬部石灰化上皮腫の1症例。横浜顎顔口外誌 1: 49-51 1988.